



TITLE:

<Book Review>Clifford Geertz, Agricultural Involution, The Processes of Ecological Change in Indonesia, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1963,xx+176p.

AUTHOR(S):

口羽, 益生

---

CITATION:

口羽, 益生. <Book Review>Clifford Geertz, Agricultural Involution, The Processes of Ecological Change in Indonesia, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1963,xx+176p.. 東南アジア研究 1964, 1(4): 105-105

ISSUE DATE:

1964

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54862>

RIGHT:

もちうるか否か、ここに基本的な問題があるのではなからうか。ビルマ、インドネシアの両国の現実は、わたくしのこの疑問を裏づけはしないだろうか。

(本岡 武)

Clifford Geertz: *Agricultural Involution, The Processes of Ecological Change in Indonesia*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1963. xx+176p.

近年 C. Geertz の意欲的な労作が次々に公表されているが、彼が1956年に謄写刷りの形で発表した *The Development of the Javanese Economy: A Socio-Cultural Approach*. (The Center for International Studies, MIT.) は、かなり長い力作でありながらも出版されなかった。この書物は、歴史概説、生態学的適応の様式、権威体系、都市化、観念体系の五つの部分から構成されている。この内の最初の部分が enlarge されて出版されたものが本書である。

題名の中の Involution とは、人類学者 A. Goldenweiser が最初に用いた用語で、一定の形式が安定化又は他の新しい形式に変形することに失敗し、内容的により複雑化し続けるような文化現象を意味する。Geertz は、この概念をジャワの零細農業の在り方に適用して、その社会経済史的背景とそれが今後のインドネシア経済に持つ意味を本書において論及する。

Geertz によれば、インドネシアには二つの伝統的な生態学的体系 (ecosystem) が存在する。即ち、焼畑的な swidden 農業と水田稲作の sawah 農業を中心とする二体系である。前者は、より多く自然の条件に依存し、主に外領地域と西南ジャワに分布している。後者は、人為的条件に依存する度合いが強く、主にジャワ、バリ島、西ロンボック島に分布している。Geertz は、この二つの ecosystem の相違を歴史的に考察する。

オランダの植民地政策の基本原理は、経済に関する限り、終始、植民地の経済構造を根本的に変形させずに農産物を世界市場に持ち出すことであった。この目標達成に三つの方式が歴史上用いられている。東印度会社、栽培制度とプランテーション制度である。特にジャワを中心とした栽培制度は、上記二つの ecosystem

の対照を際立たせる素因となったばかりではなく、インドネシア経済の二重構造 (the capital-intensive Western sector and the labor-intensive Eastern sector) を確立することになった。swidden 地域ではコーヒーが、sawah 地域では砂糖が、輸出農産物として栽培を強化された。人口増加や生産方法の発展は、この二地域の区分を社会的にも顕著なものとした。swidden 地域では、無産化が進行すると共に、農業生産物は専門化し、個人主義的傾向が強まったが、sawah 地域では、involution が深化して、土地の使用・保有法、共同生活、宗教までも、この傾向を反映して、貧困は分有された。

インドネシア農民が急増した人口を吸収する適当な場を持たなかったこと、そして、現に持たないことが、インドネシア農業の生産性に致命的であることを Geertz は、さまざまな角度から分析する。しかし、本書のオリジナル・プランが、先きに触れたように、社会や文化の側面を含むものであるため、未だ総てが論じ尽されていない感があり、残余の部分の出版が待望される。

(口羽益生)

陳荆和：『十六世紀之菲律賓華僑』新亞研究所東南亞研究室（東南亞研究專刊之二）。香港。1963年。vii+161p.

東南アジア華僑に関する論著は数多いが、現状の分析、考察を主としたものが大部分で、歴史研究に重点をおいたものは甚だ乏しい。しかし現状の考察に資し、将来を推測する手がかりを与える点で歴史研究が重要なことはいうまでもなく、かかる意味で本書のごときを得たことは喜ばしい。

著者はかつて日本に学んだことのある人で、元国立台湾大学助教授、現在香港にある新亞学院の歴史学教授をつとめ、東南アジア史の研究では目下最も活躍している中国人学者の一人である。ベトナム史に関する論考や、史料の解説、紹介が多いが、本書は氏がかつてフィリピン華僑に関して諸雑誌に発表した論考を補訂、集成したものである。

スペインによるフィリピンの植民地化はフィリピン華僑史の上において画期的重要事件であった。これを契機として華商のマニラ貿易が発展し、華僑の著しい増加をみた。しかしこれはやがて、在フィリピンのスペイン人に華僑に対する恐怖と警戒心を生ぜしめた。